

英語教育センターにおける遠隔授業への対応

渡部友子・ドンネレアリーセ・薄井洋子・矢島真澄美・阪口慧

新型コロナウイルスを原因とするパンデミックにより、2020年度は多くの機関において「遠隔元年」となった。本稿では、英語教育センター（以下「センター」）においてどのような対応が行われたかを記録として残すため、副センター長の渡部とセンター特任講師4名が分筆により報告をまとめる。対応は現在も続いているため、進行中の業務に追われて初期のことが記憶からかき消されてしまう前に、断片的にでも記録することが本稿の目的である。以下、特任講師担当の節は執筆者名を明記する。なお、本稿はセンターによる網羅的な調査報告書ではないことを付記する。

1. TOEIC Bridge テストのオンライン実施

本学では毎年度、新入生に対して入学直後にプレースメントテストを実施し、そのスコアを基に「英語IA」「英語IB」のクラス分けを実施している。2020年度も4月1日に実施するための準備が3月上旬に始まった。この時点ですでに、テスト実施団体からオンライン受験の提案があったが、本学では新入生関連行事が日程を変更してキャンパスで行われる見込みだったので、通常の試験を申し込んだ。しかしその後、集合型のオリエンテーション中止が決定されたため、届いたテスト資材はすべて未使用のまま返送することとなった。

すぐにテストのオンライン実施の検討を始めたが、申し込みから受験開始までの日数を考えると、クラス分けに間に合うかどうかギリギリの状況であった。大学上層部、入試課、および広報課の協力も得て、全新生2712名の受験者データ（学生番号、氏名、生年月日）を整え、これを実施団体に提出してオンライン実施を4月9日に申し込んだ。受験期間は4月15日～17日となり、新入生に対して大学HPから受験を告知した。受験の手引きやクラス分けに関する説明もここから閲覧・ダウンロードできるようにし、テストサイトへも直接行けるように設定した。自宅受験を原則としたが、コンピュータとインターネット環境の確保が難しい学生は、センターに連絡のうえ、指定日時に大学の情報処理センターで受験できる体制にした。

受験中のトラブルへの対応は、センターの事務室で行なう必要があった。なぜなら、通常この業務に当たる東京の「ヘルプデスク」が、緊急事態宣言発出により設置できなくなったからである。電話対応は事務職員が中心的に行なったが、特任講師もこれを支援した。期間中に受験しなかった新入生は48名で、この数字は集合実施の例年よりも多いが、オンラインでの受験率98%は格段に高い数字である、と業者は言う。なお学内受験希望者は、泉35名、土樋10名、

多賀城12名におさまり、密にならずに実施できた。

クラス分けは4月20日にセンターで行ない、この結果を基に事務職員が数日かけて、英文と教育学科を除く全新入生の「英語IA」「英語IB」の履修登録作業を完了させた。またクラス配属の結果はmanaba（本学が利用する学習管理支援システム）を通じて学生にも通知された。なお本年度は、全体の得点が大きく上昇したため、例年よりも高い得点でクラスを切り分けざるを得なくなった。そうしないと上位グレードのクラスが大きくなり過ぎてしまうからである。このことにより、想定よりも低いクラスに配属された数名の学生から不当ではないかと疑義が出されたが、事情を説明して理解を求めた。

得点が増えたのは、オンライン受験であったことが影響しているだろう。他大学でも、オンライン実施によるスコアの上昇が報告されている¹。なぜそうなるのかの分析は行われていないが、考えられる要因はいくつかある。まず、学内のコンピュータ室で受験する場合を除き、オンラインでは本人確認や受験中の監視が行われていないため、不正行為ができる環境にある。また、解答選択がクリック一つでできるため、マークを塗ったり修正したりする時間が省かれ、考える時間が増えて、結果的に得点が高くなることもありうる。ただし、問題をコンピュータ画面上で読むのは冊子と違う難しさもあるので、有利不利はそこで相殺されるかもしれない。原因は何であれ、入学者のスコアが年度により変動してもクラス分けに大きな不具合が発生しないよう、学内の制度を少し修正する必要がある。

2. 遠隔授業実施への支援

本年度5月7日開始の新学期に向けての全学的支援には、加藤学生部長や稲垣学長補佐を中心とする「遠隔授業実施サポートチーム」が献身的に当たってきたことは、周知の通りである。しかし必修（共通）英語に関わる教員特有の懸念材料があった。それは、非常勤講師が多いこと、そして授業および関連業務で日常的にコンピュータを使用していない教員が多いこと、の二つである。そのためセンターでは非常勤講師に対し、全学的に出される情報が伝わっているかの確認や、追加支援の提供を心がけた。

まず4月15日に「manabaを利用したオンデマンド授業か、ZOOMを利用したオンタイム（時間割に沿った）授業」を実施してほしい旨をセンターから通知し、既存のマニュアルの提供と質問・相談の受付を開始した。ただしmanabaを使ったことがない教員が多いと思われたため、20日には対面での支援機会を設定し、来学した数名に対し特任講師が使い方を指導した。これとは別に、22日の教養学部の遠隔授業研修会への参加も促した。また学期開始後も、センター

¹ 2020年11月27日に開催された「TOEIC Program IPテスト（オンライン）活用法セミナー」より。

に届く問い合わせや相談には随時、事務職員と所員が対応した。

これ以外では、例年昼休みを利用して実施していた「授業担当者への説明会」を動画配信で7月下旬に行なった。内容は例年通り、成績評価に関する注意事項が中心である。評価方法を適切に設計することに難しさを感じている教員が多いことは、過去のFD研修からわかっている。遠隔授業となってその難しさが増したと思われるため、グレード別に成績調整が機械的に計算できるエクセルの表をセンターが作成し、それを配布するとともに、動画の中でその表を使って見せた。グレード別の成績調整とは、英語力の差（所属グレードの違い）を受講後の最終成績に反映させる仕組みであり、得点分布が上位グレードでは高めに、下位グレードでは低めになるよう、中央値が指定されている。

以上のような支援をする中で観察されたのは、元々脆弱だったところが鮮明化する、ということである。授業実施に関してセンターが対応した案件で重大だったのは、ZOOMの操作がうまくできずパニックになった、manabaの掲示板上で受講生の書き込みが攻撃的になり收拾がつかなくなった、の二件で、いずれも遠隔授業準備中から強い不安を抱えていた非常勤講師からのものである。使用システムに不慣れだったことが原因ではあるが、教員の不安の強さが問題を大きくしたように思える。これ以外では、教員がメールアドレスを学生に公開しなかったため、授業に関する問い合わせが直接できずに受講生が困った、という事例もあった。学生とメールのやりとりをしない方針は教員の選択肢としてあってよいが、別の連絡方法を提供しなかったことが問題である。今年度から本学専用のメールアドレスが非常勤講師にも発行されたので、これを使用することは可能であろう。

成績調整に関しては、センターが提供した計算表の使い方について電話での問い合わせが数件あった。また対面での支援を強く希望した教員1名には、素点の表を持参してもらって一緒に作業をした。まず中央値を確定するために得点の並べ替えが必要だが、その第一歩から支援を要したことに驚いた。そして素点の分布にも問題があった。担当の3クラスとも素点の中央値が90点を超えていて、上位半数が100点と99点というクラスもあったため、素点が分散していることを前提とする計算式を機械的に適用できなかったのである。遠隔授業では厳格な試験を実施できないため、差がつきにくく、評価が高い方に偏る傾向は経験的に報告されている。しかしクラスの半数がほぼ満点という評価は適切とは言い難い。これまでセンターが認識していた成績評価に関する問題が、本件を通して明確な形で突きつけられたと言える。

さて、遠隔による英語授業は具体的にどのように行われたのであろうか。以下、3節から6節に渡って、センター特任講師4名による事例報告を提示する。

3. オンタイムのスピーキング授業（ドンネレ）

筆者は担当する英語IA、IBのグレードaクラスと、英語IIA、IIBのグレードaとdクラスでオンタイム授業を行なった。オンタイム授業のいい点、大変な点、そして、対策方法について具体的な事例を挙げて述べる。

筆者の授業は4技能を指導するが、最も重視するのはスピーキングである。話す練習の機会を増やすことはもちろんだが、自信を持って英語が話せるようになるために、できるだけ安心して話せる環境を作ることを心がけている。そのため、授業中に習った文法や語彙をすぐに口にして使ってもらう際に、学生にプレッシャーをかけないよう、話したい人が手を挙げて発言する制度をとっている。

このような授業を遠隔でも続けたかったため、オンデマンドではなく、オンタイムの授業を選んだ。当初は一回オンタイム、一回オンデマンドという形で実施するつもりだったが、学生と相談した結果、毎週ZOOMを利用したオンタイム授業を行うことにした。しかし、オンタイム授業のメリットとデメリットに関する記事を読み²、学生はオンタイム授業で対面授業より疲れるということが、授業を始める前にわかった。そこで学生が疲れないように、課題の一部（テキストの読解やリスニング課題など）をmanabaによるオンデマンドで実施した。ZOOMの授業では、文法、語彙、リーディング、リスニングの振り返り、そして、スピーキングとグループワークを行なった。

ZOOMに慣れるまで少し時間がかかったが、スピーキングの練習は教室での対面授業よりしやすくなった。グレードdクラスの学生は通常なかなか話してくれないが、今回は意欲的だった。グレードaクラスでも話したい学生が増えて、挙手した人全員に話す機会を与えることができなかったこともある。学生によると、ZOOMの画面で教員の顔だけを表示するように設定できるので、他の学生が気にならなくなって一对一のレッスンのような感じがした、とのことである。自宅にいるためリラックスしやすかったこともあるだろう。そしておそらく、普段自宅で孤独に過ごしているため、話したい気持ちが強まったのかもしれない。

授業中に発言したい学生は、ZOOMの「手を挙げる」ボタンを押すか、チャットに「答えたいです」と書くことにより、意思表示をした。チャットでは、教員だけにメッセージを送ることもできるので、自分の答えが正しいかどうか不安な学生は筆者だけに答えを送る。これにより、自信がない学生も答えるようになり、回数を重ねるごとに全員公開で答えを送る学生が増えた。

² <https://www.npr.org/2020/03/19/817885991/panic-gogy-teaching-online-classes-during-the-coronavirus-pandemic>; <https://www.axios.com/coronavirus-colleges-universities-7cfc5228-00fb-44e1-a850-e332050641a7.html>

ZOOMのグループワークの機能は便利で、毎回利用したくなるほどである。椅子や机の移動が不要であることは当然だが、学生が大声で話しても、他のグループの邪魔にならないという点が優れている。学生たちもグループワークが好きになったようである。また細かい点だが、ZOOMで学生の名前が表示されることも教員の助けになる。通常授業では、全員の学生の名前を覚えるのに2-3ヶ月はかかるからだ。

前期の授業改善のための学生アンケートを見ると、評価は予想より良かった。学生のコメントで「わかりやすかった」「面白かった」などの内容が多く、「オンタイム授業だったのでよりしっかりと聞こうとする意識を持つことができ、主体的に授業へ参加することができた」というコメントもあった。後期の第1回授業で前期の振り返りをしたとき、オンタイム授業が思ったより良かったという発言があった。それは授業の内容からの影響かもしれないが、少なくとも筆者のZOOMでの授業では学生が疲れていないということがわかった。

以上のように、遠隔授業は全体的にうまくいったと思うが、問題点は二つある。まず、インターネット環境やデバイスのトラブルが発生すれば、授業に支障が出る、という点である。例えば、授業の途中で「先生の声が消えます」、「何も聞こえません」という声が出て、授業中トラブルシューティングをしなければならなかったことは何度もある。不安定なインターネット環境の中で授業を受けている学生もいたようだ。また、筆者のパソコンのシステムがクラッシュしたことも一回あった。予備のパソコンが手元にあったのですぐに復旧できたが、このとき、授業が突然消えてしまう経験をした学生の気持ちがよくわかった。学生のアンケートの中ではZOOMやインターネット環境に関する不満が多かったので、後期の第1回授業では、よく発生する不具合（例えば、ZOOM教室に入れない、マイクがつかない、など）の解決方法について話した。

次に、遠隔授業ではクラスの雰囲気や状況を把握することが難しい点も問題である。例えばパワーポイントを使いながら説明するとき、教室であれば学生の顔を見て、理解しているかどうかを確認できる。しかしZOOMでは、画面にスライドを表示すると学生の様子を見ることができないので、説明が一方的になる。学生たちも教員との距離感を感じると言っていた。また、教室では授業のあと質問や相談に来る学生が通常いるが、ZOOMではアプローチしにくいというコメントがあった。対策として、ZOOMで一对一の相談機会を設けたところ、何人かが利用した。

以上、ZOOMのオンタイム授業の経験について述べた。遠隔授業には便利なところもあるが、やはり早く教室での授業に戻りたいと思う。なぜなら、たとえスピーキングの練習がしやすいとしても、ZOOMでの会話は直接会って話すときの会話とずいぶん違うからである。しかし、教室での授業が可能になっても、ZOOMを「えいごりらうんじ」(センターが運営する学習相

談室)や個人相談に利用したらよいと考える。自宅でも遠隔接続でスピーキングをすることができたら、学生の話す力はさらに向上するかもしれない。

4. グレードaクラスの授業をオンデマンド化する(薄井)

これまで筆者が担当してきたグレードaクラスの英語では、対面による英語でのプレゼンテーションを中心とし授業を展開してきた。プレゼンテーションを取り入れた学習は人の前で発表したり、また議論したりすることで成り立つものであり、人と人の対話が重要となる。しかし、本年度は新型コロナウイルス感染拡大により、対面による授業が実施できなくなった。そこで、遠隔で授業を行いつつも対面による授業に近づけ、これまでの学習効果をできる限り落とさないようにする方法を模索した。本稿では、2020年度前期のグレードaクラスのプレゼンテーションを中心とした英語の授業をどのように進めたか、そして成果と問題点を報告する。

4.1 オンデマンド化の方法

本授業では、毎回50分程度の授業動画(授業の解説や課題の提出方法などの指示)をパワーポイントとZOOMを使い作成し、その動画を毎回授業開始時間にあわせて配信した。受講する学生は、毎週授業開始時間に合わせて配信されるmanabaのコースニュースを確認し、指示に従って課題を作成し、締め切りを守って提出する。まず授業動画を50分程度視聴し、残りの時間は課題とふり返りを行なう、というのが基本的な流れである。

授業は全15回(ただし最終回は授業時間外の「課題研究」)で、各回とも、前半に社会的な問題を扱ったニュースを使い、リスニング、リーディングおよびライティングを行った。まず、学生には英語のニュース記事の音源を聞くこと(リスニング)とニュース記事のスク립トを読むこと(リーディング)で内容を把握するよう指示をし、その後、関連するリーディングの記事を要約させた(要約課題)。さらにその記事に対する自分の意見を英語で書くことでライティングの強化を目指した(ライティング課題)。そして授業の後半では、プレゼンテーションの作成に取り組ませた。トピックは、自己紹介や、教材としたニュース記事に関する自分の考えなどである。授業では、要約のテンプレートやサンプル原稿の提示のほか、パワーポイントを使った音声の記録方法や、実際のプレゼンテーションで役立つ表現(挨拶や図の説明方法、まとめの言い方)のリストを示し、課題に取り組む際の手助けとした。そして授業の最後に、ふり返りを行なう。なお、課題研究では、20分程度のTED Talksのスピーチを2本視聴し、プレゼンテーションの話し方や構成や内容などを見て良い点をまとめてもらった。

課題の提出方法は3種類あった。要約課題、ライティング課題、課題研究では、manabaのレポート機能を使い、フォーム上に直接解答を入力させた。プレゼンテーションの課題におい

では、各自が作成したパワーポイントのスライドに自身の音声をつけたファイルを、指定したGoogle Driveのフォルダに提出させた。さらに、プレゼンテーションの評価と授業内のふり返りはGoogle Formで作成したアンケートに直接入力させる形で回収した。

評価方法は課題により異なる。要約課題（24点）は、内容の選び方とつなげ方の適切さで評価し、ライティング課題（24点）は、文章構成と書いた量で評価した。この二つの課題においてはルーブリックを作成し、学生に事前に提示した。一方プレゼンテーション（30点）は、聞きやすさ、情報量、内容の面白さ、スライドの出来、話した時間の5つの項目について、教員と学生がそれぞれ評価した。学生には、自分の発表を自己評価し、さらに自分以外の発表も30人分評価し、評価結果を提出するよう指示した。ふり返り（14点）は、書いた量で評価し、課題研究（8点）は、内容の選び方と書いた量で評価した。

4.2 遠隔授業の効果と問題点

最後の授業で独自の授業アンケートを行なったところ、学生からは「課題が多い中でも、毎回課題に対する異なったコメントがあったのでなんとか頑張れた」、「クラスメイトがどのように学習しているかのフィードバックを毎回くれたので頑張ろうと思った」といった感想が得られた。オンデマンドの授業で一番意識していたのは、教員から学生への一方通行を避けることだった。学習効果を高めるという点においては、学生が毎回、授業のフィードバックを教員から得られる環境を作っていた。個別であろうとも双方向コミュニケーションが、遠隔授業の学びでは重要になると考えられる。

また「英語だけでなくパワーポイントでの音声記録方法を学ぶことができ、今後活かせると思った」「プレゼンがあったので自分の考えが整理された」といった感想も得られた。この英語の授業は指示された英語の内容を理解したうえで、それに対する自分の考えをまとめ、その考えをパワーポイントのスライドで表現するという流れであった。これは、授業でインプットした内容についてプレゼンテーションを通してアウトプットさせる実践課題も盛り込まれていた、ということである。これは遠隔教育においても重要な過程であると考えられる。

一方、遠隔授業は対面とは違う難しさがあったのは事実である。それは学生と教員とのコミュニケーションが容易に取れなかったことである。第1回目の授業のふり返りでは「授業についていけないのか不安」や「課題がこなせるか不安」といった声が多かった。対面の授業でこれまでは毎週決まった時間に学生が集まり、授業のはじめに顔を見ながら一人一人と軽い挨拶などを行っていた。そのことが授業の雰囲気づくりや気軽に質問ができるといった助けとなっていたが、今年度前期の授業では「オンデマンド授業」ということもあり、学生の顔をみて話す機会が全くなかった。そのため、できるか限り学生からの声を聞くように努めていた。学生に

は毎回授業のふり返りで「この授業に対する問題や要望」というのを積極的に聞くようにし、可能な限り学生からの要望にすぐに応える努力をした。「個人的に質問がしたい場合の連絡先の提示、授業の流れの指示が明確であること、課題提出方法が分かりやすく、提出したことが視覚でわかる工夫、課題の評価がすぐにわかるようにすること」を徹底した。また、授業動画だけではなく、課題の作成および提出方法など重要な内容は、PDFファイルをGoogle Driveにアップロードすることで、学生はいつでも確認ができるようにした。このような手立てにより、学生を安心させることが必要だと思われる。

5. グレードeクラスのスピーチ指導（矢島）

本学で英語のプレースメントテストによって、最も低いグレードeに配属される学生は、英語に対する苦手意識が強く、勉強の仕方がわからない者も多い。そのために、彼らの苦手意識を軽減し、「自分で英文を作って言えた」という体験をしてもらうために、ZOOMを用いて以下のようなスピーチ原稿の作成における指導を行った。

学生がスピーチ原稿を作成する際に、日本語で文章を書いてから英語に訳する様子をしばしば目にする。しかし、彼らの多くが、英文法や文章の構造を十分に理解することなく、思いのままに日本語を書き、それを英語に訳すため、文法上のミスが多く、彼らの原稿の添削にかなりの時間を費やすことになる。そこで、遠隔で行われる本授業では、学生がそれぞれ自分の原稿を添削する機会を設けることとした。その手順は以下ようになる。

第一に、文法や文章構造を理解してもらうために、スピーチ原稿を書く上で必要な文法、主文、支持文、結論文など文章の構造についての解説を動画で配信し、それをもとに、英語の文法を意識して日本語で原稿を書くように指示をした。グレードeの学生は、英文における主語と動詞の関係を明確に理解していない傾向がある。そこで、のちに各自が英語に変換するということを踏まえて、それぞれの文における主語と動詞に当たる日本語には、下線を引くように伝えた。このようにして出来上がった原稿を学生たちはmanabaから提出した。

第二に、提出された原稿の中からいくつかを任意で選び、ZOOMの画面共有機能を使って授業で皆に示し、文法上の注意点や、修正の方法などの解説を加えながら、画面上で教員が添削する様子を公開した。その際、学生には自分のレポートも手元で見ながら解説を聞き、自分で添削するように促した。解説と自己添削は同時進行で行われ、質問等がある場合は、ZOOM内で受け付け、すぐに解答するように努めた。画面上で様々な学生の原稿を教員が添削する様子を見ることで、学生は同じような間違いを自分で見つけ、添削することができたようである。最後に、学生たちはその日本語の原稿を元に英文を完成させた。

上記のように原稿の添削を行なった結果、完成したスピーチ原稿は、ただ提出されたものを

教員が添削し、返却するという従来の指導方法の場合よりも、より理解しやすい文章となった。これは、自分の原稿を再チェックする方法と機会を与えられたことにより、提出できるレベルになったか、改善の必要があるか、などを自己判断できるようになった結果だと思われる。つまり「とりえず出せばよい」「先生に直されるのを待つ」という丸投げと受け身の姿勢が低減した、ということである。コンピューターのスクリーンという限られた空間に提示された視覚的情報が、学習を助けたとも言えるかも知れない。なお、実際のスピーチ（準備した原稿を口頭で読む課題）については、他者の視線を気にすることなく落ち着いてできるようにするために、各自がスピーチを行う様子をスマートフォンなどで撮影し、その動画をmanabaより提出させた。この経験を踏まえて、後期はZOOM上で発表をしてもらう予定である。遠隔での英語スピーチの指導には不安やもどかしさもあったが、以上のようにZOOMなどを活用することで、少なくとも原稿作成の指導においては、対面授業よりも充実した指導ができたのではないだろうか。今後も遠隔または対面とそれぞれにおける利点を生かしながら、指導上の工夫を行なっていきたい。

6. 映像を使ったオンデマンド型授業（阪口）

筆者は本年度、オンデマンド形式とオンタイム形式を併用して授業を行なった。授業形態の選択に関する詳細、そしてオンデマンド授業のコンテンツ制作に関する工夫に関しては、別稿³で説明されている。本稿では、動画を中心としたオンデマンド授業のコンテンツ制作に関して重要だと思われる、以下の2点について報告する。

動画にBGM、効果音を付ける

重要な箇所でテロップ、字幕などの映像効果を利用する

この2点は、学生にとって身近であるYouTubeでの動画配信者が視聴者を惹きつけるために行なっていると思われる工夫である。

筆者が担当した6授業において動画コンテンツが好評であったことは、全学的に実施された前期の授業評価アンケートの結果から読み取れる。なぜなら、質問項目「あなたは、この授業の内容を理解できましたか」「あなたはこの授業の内容に興味をもてましたか」に続く自由記述を分析すると、「動画」と「わかる」、「授業」と「面白い」などの語が記述内で共起する傾向が見られるからである。つまり、授業の面白さや楽しさ、そしてわかりやすさに動画が寄与したのではないかと推察される。なお、自由記述における頻出語の分析方法と結果の詳細につ

³ 阪口慧（印刷中）「新任教員座談会：前期授業を振り返って—授業形態の選択・オンデマンドにおけるコンテンツ制作における工夫—」『東北学院大学 FDニュース』32: 掲載ページ未定

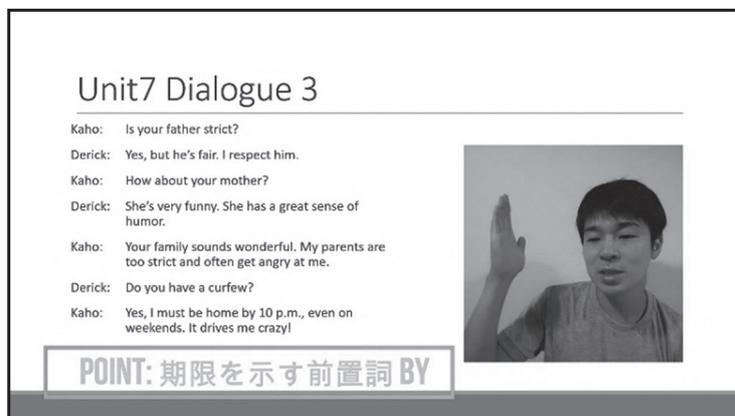
いては、紙幅の都合により別稿（執筆中）に譲る。

しかし、全学共通のアンケート調査では、具体的に動画のどの要素が学習の興味を惹きつけることができるかを明らかにすることができない。そこで、授業評価アンケートの自由回答の記入数が最も良かったクラスに対して、冒頭の具体的な工夫について問う簡易アンケートをオンライン授業時⁴に実施した。回答の負担を軽減するため、以下の質問に対し、ZOOMのアンケート機能を利用し、各設問の回答はYES-NOの二択で実施した。回答者数は31である。

1. BGMはあったほうがよいか
2. テロップや字幕はあったほうがよいか
3. テロップや字幕を出す際の効果音はあったほうがよいか
4. これらの編集が加えられた動画の方が、集中力が続くか

結果は、質問3のみYESとNOがほぼ同数であったが、それ以外ではYESが6割を超え、質問2ではYESが9割に達した。つまり、動画に何かしらの編集を加えた方がよく、音声の効果よりも文字情報の方が学生の理解度に寄与している、と言えそうである。

以下に、動画にテロップや字幕を挿入した例を示す。これは、PowerPointで作成した動画に対して、画面下にテロップを挿入したものである。印刷の都合により、カラーで示すことができないことをご容赦願いたい。



動画ではまず、教材のダイアログがスライドの左側に示され、これを教員が口頭で解説する映像が右側に流れる。そして解説中に最重要点が出てきたタイミングで、画面下の文字列が現れる。視覚的に惹きつけるべく枠線がアニメーションを伴って動き、かつ背景や他の文字と異なる色・フォントで表示される。またテロップ表示に聴覚的にも注意を惹くべく、効果音が鳴

⁴ 2020年12月2日 実施

るように編集している。このように重要点を視覚的に強調することは、対面授業や遠隔オンラインの「生の」説明においても黒板やホワイトボードを使えば可能であるが、解説が中断される。それに対し編集された動画では、それを滑らかに提示することができる。この特徴を生かせば、オンデマンド授業ならではの学習効果が生まれるだろう。

無論、オンデマンドで配信する動画を準備する作業は、対面やオンライン授業の準備と執行よりも労力を要する側面がある。また、質を高めるための映像編集は突き詰めれば途方ない作業である。しかし本事例のように、必要最低限の箇所に絞ってテロップや字幕を挿入することは、それほどの負担増とならずに学習効果を高める可能性がある。本稿の事例がコロナ禍における学習の質の向上に寄与することを願ってやまない。

7. 今後に向けて

2021年度の授業形態は、大規模な講義科目はオンデマンド型授業、それ以外は原則対面授業とする方針が出された。したがって、英語の授業は原則対面となる。そして、何らかの事情により教室で受講できない学生のために、ZOOMを補助的に利用して教室と遠隔で結ぶ、という「ハイブリッド」形態を準備するよう指示が出ている。このハイブリッド型は機材の使用方に工夫が必要なので、英語教員にとってさらなる不安材料となることが予想される。そのためセンターでは、2020年度後期にハイブリッド型を試行している韓国語教員の授業を参観・録画させてもらい、編集した動画を全英語教員に参考資料として提供することにした。また、集合型FD研修の代替として、授業運営に関わる様々な困りごとを相談できるZOOMミーティングを2回開室する予定である。

なお、2年次の後期末に受験を課すTOEIC Bridgeについては、2021年1月にオンライン実施とした。例年の集合受験においては、テスト資材の受領と返送は言うまでもなく、日程調整と教室や監督者の確保、そして当日のトラブル対応に多大な労力を要していたので、それがほぼ無くなることは非常にありがたい。しかし年度末では入学時と違って得点が成績に直接算入されるため、不正行為を誘発しやすい。したがってオンライン実施により監督ができなくなることは、問題として残る。試験実施団体によれば、2021年度からはAIを使って受験者の不審な動きを検知する監督サービスが開始される、とのことである。それが利用可能になれば、オンラインの重大な欠点が解消されるので、紙媒体による集合実施からオンライン実施に完全に切り替えることになろう。